

現場での体験談



フライングドクターの活動で、年間数万人の人が救助されています。そこには、医師、看護師、パイロット、そして患者による無数のドラマが存在します。このページでは、その中の救助要請者と医師、パイロットの3人の実体験談を紹介します。

※注：写真は全てイメージです。

「忘れていた決意」

救助された男の子の母親の話

西オーストラリア州からタスマニア州に引越しをすることになって荷物を整理していた時、1枚のポラロイド写真が出てきました。そこに写っているのは、体中にチューブが付けられてベッドに横たわっている、当時3歳だった息子のライアンでした。歳月を経て少し色褪せたその写真は、私に11年前に起こったある出来事を思い出させました。そして、その時心に決めたにも係わらず忘れていた決意を今、果たすことを決めたのです。

11年前、私と夫、そして2人息子のショーンとライアンは長期の旅行中でした。ある日、私たちがモンキー・マイア (Monkey Mia) でテントを張っている時、ライアンの顔色が少し悪いことに私は気付きました。「小さい子どもがこれだけの距離の旅行についてきているのだから、疲れているのだろう」と、私は自分自身に言い聞かせてあまり心配はしなかったのですが、同じように息子の異常に気付いた夫は、近くにある看護施設にライアンを連れていくように私に言いました。私は、施設の人たちは私たちが過剰に反応していると思うだろうと、そこまでの必要はないと思いましたが…。

しかし看護施設に向かう途中、ライアンの容態は悪化しました。顔は真っ青になり、呼吸をするのも苦しそうです。そこにきて、ようやく私は息子の身体が大変な状態にあることに気が付いたのです。

施設に着き、看護師は息子を一目見るとすぐに電話に飛びついて、フライングド

クターに救助要請の電話を掛けました。息子の状態は、そのくらい急を要していたのです。フライングドクターは数十分のうちに到着し、私とライアンをパースに搬送してくれました。飛行中、フライングドクターの医師と看護師は衰弱しているライアンに応急処置を施し、同時に私に息子の



イメージ写真 (体験談とは関係ありません)

病状について詳しく教えてくれました。息子の病名は、急性喉頭蓋炎。気管にある喉頭蓋という部分が腫れ上がり、気管を塞いでしまうため呼吸困難で最終的には窒息死に至る、という病気でした。しかし、フライングドクターによる迅速かつ適切な処置のおかげで、ライアンは5日間の入院後、すっかり回復しました。

それから11年。私が写真を見て思い出した決意は、いつかライアンを助けてくれたフライングドクターの医師に、ライアン自身から感謝の気持ちを伝える、ということでした。私はフライングドクターに電話をかけ、ライアンを救った医師を探してもらえるようお願いしました。そして数日後、私とライアンは当時の思い出を回想しながら、ジャンダコット (Jandakot)

の基地に向かいました。

なにせ11年も前のことだったので、その基地のスタッフもその医師を見つけ出すには大変な苦勞をしたと思います。しかし私たちは、息子を救ったステファン・ラングフォード先生に会うことができたのです。ステファン先生はその時、西オーストラリア区域本部で医療局長を務めていました。更に嬉しいことに、先生は、ライアンを搬送した時のことをまるで昨日のこのように鮮明に覚えていてくれたのです。

その日は私たちにとって、一生忘れられない思い出になりました。それは、14歳になったライアンが、自分の口から先生に感謝を伝えることができ、私自身も、遠い過去に決めた決意を果たすことができたからです。都市部にいる、内陸部の何十倍、何百倍もの数の人々が考えもしないように、私たち家族も自分たちがフライングドクターに救助されることになるとは夢にも思っていませんでした。しかし、彼らのおかげで息子は助かり、今私たち家族が幸せな生活を送れていると思うと、彼らのことがすごく身近な存在に感じられます。



イメージ写真 (体験談とは関係ありません)

「14時間の搬送」

ある救助を成功させた医師の話

静かな月曜日の朝。私はいつものように基地で待機していました。そんな時、かかってきた1本の電話。それは、ダイヤモンド (Diamantina: クイーンズランド州南西部の地域) のある牧場からの緊急の救助要請でした。

話を聞くと、ある牧夫が放牧していた家畜を馬に乗って集めていた時、その馬が転んだ。そして、馬が地面に落ちた牧夫の背中を踏んで起き上がったため、その牧夫は背骨を損傷し、身動きをとることができなくなってしまった、ということでした。電話の主は、現場にいたその牧夫の仲間が事故の内容を牧場に無線で伝えてきたため、牧場からこうして電話をしている、ということでした。

私はすぐに無線で、現場から牧場に連絡した牧夫の仲間と話をすることにしました。私は、これ以上の損傷を与えないように患者を動かさないこと、そしてできるだけ日陰を与えるように指示をしました。その後、私はパイロット、看護師と一緒に牧場に向かいました。到着後、医療用具を飛行機から降ろし、小型トラックに

積み、現場までの道を聞きました。すると1人の牧夫が、その道路は未舗装だから現場までは車で2時間半以上かかると言いました。できるだけ早い処置が必要だと考えていた私は愕然としましたが、その時にその牧場にある2人乗りの小型ヘリコプターが目にとまりました。小さすぎて医療器具を全て積むことはできないと思いましたが、考えた結果、同伴した看護師がトラックで全ての器具を運び、私は小さいバッグに診断に必要なものだけ



イメージ写真 (体験談とは関係ありません)

を入れて先にヘリコプターで現場に向かうことになりました。それは、トラックが着いて本格的な処置が始まる前に患者の容態を診ておくことによって、全体の所要時間を短縮させるためでした。

現場には、脊髄損傷で四肢麻痺になっている49歳の男性が横たわっていました。私はすぐに診察をし、これからの処置方法を決めましたが、やはり本格的な

処置はトラックを待たなければいけませんでした。

2時間後トラックが到着し、高温と砂ぼこり、そして大量のハエと戦いながら、私たちは患者を専用のマットレスに静かに乗せ、また来た道を折り返しました。当然ながら、患者を安静に移動させるため、飛行機の待つ牧場までは更に時間がかかりました。

牧場で、脊髄損傷患者の専門医が常勤しているブリスベンの病院に連絡をとり、私たちは飛行機に患者と荷物を全て積み込んで、一旦基地に戻り燃料を補充して病院に向かうことにしました。基地に着いたときには、すでに日が沈んでいました。そしてブリスベンに着いたときは、もう日付が変わる時間でした。私たちはブリスベン空港に着陸し、待機していた救急車に患者を乗せて、病院に一緒に向かいました。

その患者は、現在牧場に復帰しています。病院で専門の医師から聞いた話によると、患者の回復が早かったのは、搬送の方法など私たちの処置が適切だったからだそうです。厳しい環境の中での合計14時間にも及んだこの任務。患者が回復した今では、それだけの価値があるものだったと確信しています。

「困難な着陸」

あるパイロットの話



イメージ写真 (体験談とは関係ありません)

1998年9月11日、私は西オーストラリア区域のカルグーリー (Kalgoorlie) の基地にいました。その日は午前8時45分に1人の患者をパースの病院まで搬送する予定になっていました。しかし、出発準備をしていた私は、レイバートン (Laverton: パー

スから東に約950kmにある町) での自動車事故を知らされ、すぐに現場に向かうことになったのです。私は、患者の容態が一刻の猶予も許さないため現場付近に着陸して欲しい、という要請を受けましたが、すぐにある問題が浮かび上がりました。それは、現場付近に滑走路がないため道路に着陸しなければいけないこと、そして着陸をするにはその道路は幅が足りないということでした。少し考え、私は現場付近のドライブインの店員に、道路両脇の木を切り倒して道路の幅を広くしてもらおうように頼み、同時に、チーフ・パイロットからこのような状況での着陸の注意点などの指示を仰ぎました。そして急いで現場に向かったのです。

現場上空まで来ると、大柄の男がチェーンソーで着陸する道路の脇にある最後の木を切っているのが見えました。私はまず、

低空飛行で道路付近まで近づき、道路面や幅などがなんとか着陸できる状態であることを確かめました。風速は8~10ノット (約4~5m/秒) で横向きの風。慣れない道路への着陸に緊張感と恐れが込みあがってきました。私は着陸態勢をとり、着陸位置を選びました。そして…。

私は、その当時の自分にとっては1番と言ってもいいほど、滑らかな着陸を成功させたのです。一緒に乗っていた、医師と看護師から拍手をもらうほどでした。

2時間後、患者を乗せ今度は離陸の準備に入りました。離陸後、飛行機が一瞬少し傾きましたが、なんとか私たちはパースに向けて飛び立ちました。

このフライトにより、フライングドクターの任務がまた1つ、成功に終わりました。